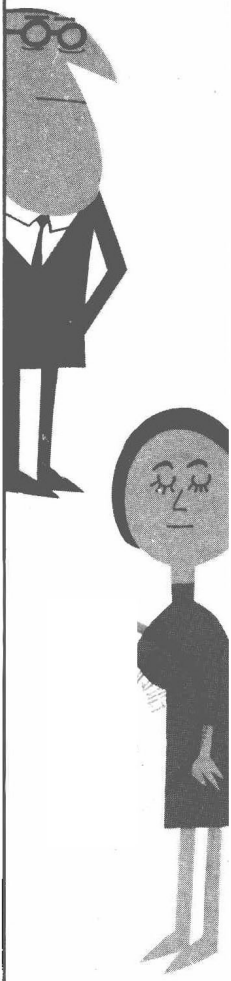


分利満氏大いに怒る

山口瞳

新潮社

江分利満氏大いに怒る

昭和四十四年十月十五日印刷
昭和四十四年十月二十日発行

定価　四〇〇円

著者　山口瞳

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二一一一
振替　東京八〇八番

印刷所　塚田印刷株式会社
製本所　神田加藤製本所

（乱丁、落丁本はおとりかえいたします）

© Hitomi Yamaguchi 1969　Printed in Japan

目

次

江分利満氏の元日……七
悲暑地のできごと……一三
週間日記……二一
美術品と五月と……二七
文士劇初出演の弁……三五
文士劇正統派……三八
大日本酒乱党宣言……四一
新聞広告と私……四九
交響曲「軟口蓋」……五三
されどわれ悪書を愛す……五八
旅行けば……六六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

江分利満氏の戦後日記……七四
非行少年論……八二
賭博的人生論……八九
宴会三題噺……九八
私のなつかしのメロディ……一〇六
私のオシャレ哲学……一一四
TVタレント落第生の弁……一二三
元祖「マジメ人間」大いに怒る……一三一
飲まず 打たず 買わず……一四七
サラリーマンのスパイ活動……一五五
如是我観BG……一六三

ホステスに手を出すな……一七三
正月の子供たち……一八〇
江分利満氏の受胎告知……一八四
夏帽子とうすら笑い……一八八
名騎手森安引退す……一九三
駄目な奴、私の母……二一〇
江分利満氏の「舞台再訪」……二二六

装幀
カット　柳原良平

江分利満氏大いに怒る

江分利満氏の元日

直木三十五という人は、男がいったん表札を掲げたら容易にはずしてはいけない、と言ったという。そのことを誰かが書いたのを読んだ記憶があって、痛く感動した記憶があって、感動したからといってその記憶が正しいものであるかどうかわからないが、江分利のそのときの受取り方でいえば、直木三十五は甚だしく貧乏していて、借金取りに追いまわされているが、男が一戸を構えた以上はどんなことがあっても家をたたんだり夜逃げしたりしてはいけない、というふうであった。直木三十五は長火鉢の前に坐って長煙管でスパスパ刻み煙草を吸っていたという。こうなると江分利の直木三十五に対するイメージがまざってくるからますます怪しくなるが、そんなふうであって、落語のニラミガエシみたいになってしまうが、江分利は、ひどく打たれた。男はそういうもんだ、と思ったのである。

だから、というと論理的にツジツマがあうみたいだが、その辺はどうもボヤッとしているが、

あえていうならば、だから江分利は、元日は絶対に年始に行かないのである。江分利も東西電機の社宅の二軒長屋のテラス・ハウスに亜鉛板を腐蝕させた横書の表札を掲げている。従って、江分利も表札を出した以上は断乎として元日には年始に行かない。行かないばかりか元日には一歩も外へ出ない。庭へも出ない。年始に来るなら向うからやって来い！　男としての江分利は心中深く期する所があるわけだ。俺だって男だゾ。

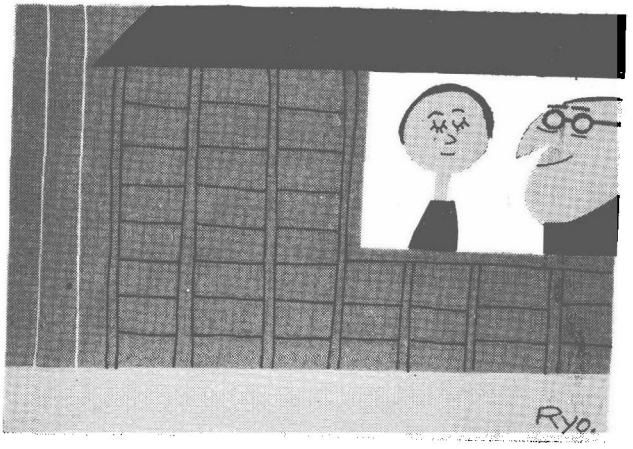
実をいうと、元日に挨拶に出向かなければ義理のわるい家が何軒かある。まず直属の部長宅へはハガキの五枚も持って年始に行くべきだろう。しかし、行かない。（余談だが、歳暮はともかく、年始に大層な進物をする習慣は極く最近のことではあるまいか。年始に進物するのはエチケットに反するのではないか？　ハガキ五枚とか手拭一本というのが目下としての礼儀ではないか）

元日に皆集まって飲んで騒いで面白いからゼヒいらっしゃいと誘ってくれる家もある。その人にも会いたいし、そこへ来る誰某にも会いたいが、ガマンする。行ってやるもんか！　スキー場の山小舎（ごや）で乾杯しようと毎年シツコイ程さそってくれる友人もある。大晦日（おおみそか）から麻雀やって徹夜して十二時に雑煮を食べようという古い年長の友人宅もある。ダメだダメだ、みんな駄目だ！

昭和二十四年に江分利は夏子と結婚した。北向きの陽の当らない四畳半一間を借りた。当時灰田勝彦の『東京の屋根の下』という歌謡曲がヒットした。江分利は音痴だが、ナンニーモナクテモヨイ、口笛吹いて行こうよ、というくだりを繰返し歌った。実際は江分利は口笛も吹けないのだが、つまり、それしか無かった。ナンニモナクテモヨイわけはないのだが、本当に何も無かった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和三十七年は『王将』である。『王将』もとても全部は憶えられないし、その必要もないのだが、二番だけ歌う。(これも余談だが坂田三吉という将棋指しはそんなに強くなかったのではないか。棋譜を見るとそんな気がする。少なくとも升田幸三とは相当ひらきがあるのではないか)『王将』の二番は「あの手この手の思案を胸に、破れ長屋で今年も暮れた。愚痴も言わずに女房の小春、つくる笑顔がいじらしい」である。このなかの「破れ長屋で今年も暮れた。愚痴も言わずに女房の小春」をたえずクチずさむのである。潜在意識に訴えようとする戦法である。小春を時々夏子に置きかえる。「やぁぶぅれナガヤで今年もくれたぁ、グゥチも言わずにぃニョーボのナツコォ」これは凄い実感があるよ。低音でいきますからね。バーの請求書と年末賞与とどういうバランスシートに相成りますか。人生でこれ以上のスリリングな局面はないのではあるまいか。



表札を掲げる前の江分利は元日に何をしたか？　汚ないズボンに黒のセーターでライスボウルを観戦した。勿論外套なんか着ない。元日は大体において暖かい日が多い。そんなとき知人に道で会うと面白かったね。向うはモーニングやら黒紋付やら。江分利を見ると「おやっ」という顔をする。まあそんなことを面白がったのは江分利が若かったせいだろう。今の年齢ではキザになる。

さて、それならば、今の江分利は元日に何をするのか。何もしないのである。一年でこれくらい何もしない日は一日もないだろう。朝、早く起きる。嗽手水に身を清めるね。和服はないし、背広を着る必要はないから、やはり軍隊ズボンに黒のセーターである。庄助は夏子の仕立てた背広まがいに蝶ネクタイなんかして正座して「パパおめでとうございます」と言う。何が芽出たいもんかね、貯金が一万円ありゃ御の字というお父様だよ。夏子は一番上等の和服を着て来客に備える。吉住小三郎さんか吉住小三八さんの長唄をラジオで聴く。『鶴亀』か『蓬萊』か。テレビで能を拝見する。

二階の六畳間に客に備えて卓袱台を出し、オセチ料理を並べ、座蒲団を四人分位ならべる。さあ、いつでも来い。菊正宗と賀茂鶴はいつでもお燗できるように大徳利に用意してある。庄助が時々あがってきて、料理を失敬する。（おい、カズノコはよせよ、数がすくないんだから）オツマミは毎年江分利が魚河岸で見立ててくるから、そうバカにしたものでもない。江分利は卓袱台の前に端然と坐って客を待つ。これが男というものだ、江分利は固く自分に言いきかせる。表札出

した男は動いちゃいけないぞ。そうして、誰か来たら丁寧に礼儀正しく、明るく清らかな気持で酌み交わそう。コップでなく猪口でやろう。ジワーッと飲み、ジワーッと酔ってやろう。酒がなくなったらウイスキーのストックがあるから安心である。誰か来ないかなあ。

庄助が、またあがってくる。「パパどうするの？　何するの？」そんなこと言ったって仕方ないじゃないか。俺だって恰好がつかないんだよ。お前だって今に分るよ。最初の一杯を男同士で晴れやかに笑いながら飲みたいんだよ、俺は。「今年も……」と言って、後は口のなかでモグモグ言うだけで杯をあげたいんだよ。「まあどうぞ、おたいらに、ご遠慮なく」そんなふうにいきたいんだよ。

日が落ちかかってくる。客はない。考えてみると、江分利の所へ元日に年始に来る客なんてあるわけがない。江分利は泣きたくなる。本当に涙がこぼれそうになる。しかし、精神だけは直木三十五でいこうじゃないか。

午後四時を過ぎる。「おい夏子、しょうがねえや、お燗つけてくれよ」

そうなると江分利は一本の酒が飲めなくなる。「おい、お前もつきあえ」「なあ、日本酒なんてうまくねえや。サントリー持って来いよ。その方が早くっていいや」「おい、庄助、まだ誰か来るかも知れねえからな、カズノコとキントンは程々にしろよ」

そうして、江分利は元日は割に早く寝るのである。

悲暑地のできごと

夏は暑い。暑いから避暑に行くのである。しかし、それなら、軽井沢や野尻湖や鎌倉山や葉山の別荘にいる主婦たちは涼しそうな顔をしているか？　断じて否である。こころみに、親子三人、旦那はテトロンの上下にカルピスの詰合せを手土産に持ち、妻はムームーに日傘差して、子供は捕虫網に麦藁帽子といういでたちで、その一軒をたずねてみるとよい。

「まあまあ、よくいらっしゃいました。お暑いところを……」と、そりゃ口ではいいますよ。「さあ、どうぞどうぞ、坊ちゃんおみ大きくおなりになって、さあどうぞ、東京はお暑うございましょ。あなた、裸におなりになったら、あら、ご遠慮はいりませんことよ、ここは田舎なんざんすから、上着をお脱ぎになって……奥様、そこがお涼しいことよ、いえ、そこじゃないんですのよ、そこは西陽がさしましてね、いえ、もちょっと右の方へお寄りになって……いえそうじゃないんです、こちらの方へお寄りになって、そう、そこが風の通り道なんですのよ。まあ、坊ちゃん、いいもの持ってるわねえ、オバチャマに見せてよ、ここはトンボや蝶々がたくさんいましてよ、あらお待

ちなさいよ、いま、お寿司をそいったところですから。坊ちゃんは西瓜がよろしいでしょ、ネエやあ！　あらあら、なんですか、頂戴ものですか、いつもいただくばっかりで……そうですかあ、じゃ遠慮なく、ホントによくいらっしゃいましたこと……昨日、今井さんがお帰りになりましてね、ご一緒だとよござんしたのにね、こないだは、山崎さんが、はあ、家中でお見えになって、ええ、おばあちゃんまで……お丈夫でいらっしゃいますのねえ、あちら。トウモロコシ三本お食べになって、あとで天丼をちゃんと一人前、ペロッと召しあがりましたのよ、ホホホ」

となるが、この間に避暑地の主婦をじっくり観察されたい。目に冴えがない、口もとがこわばっている、客攻めで疲労コンパイしているのだ。さきほどの言葉の真意は次のようになる。

「アラアラ、また客かい、三人も。この子汚ない足だね、親が気がつかないのかしら。裸になったって、ズボンまでぬがなくても……ステテコのボタンがはずれてるじゃない。みっともない。右の方へ寄れったら寄ったらいいじゃないの、右ったら左へ寄るんだから、いい歳して若妻ぶってモジモジしたり、ジレッタイわね。馬鹿だね、この子も、いまどき昆虫がいると思ってるのかね。お寿司だって西瓜だってタダじゃないんだよ。ナニ、またカルピスかい、これで三日泊るのはフトイよ。今井さんや山崎さんもそうだけど、あんたがたもあんたがただよ」

だから、避暑なんかに行くもんじゃない、こっちにすりゃ、来いといったから行っただけの話で、たしかに「チトお立ちより遊ばせ、軽井沢はよござんすよ」といったじゃねえか。

まして別荘なんか持つもんじゃない、十万円の予算は二十万円を軽くオーバーする。ために株を手離したり、ヘトヘトになって秋になってあらためて温泉に休養に行くハメになる。これでは

なんのために避暑に行ったのか分らない。テトロンとムームーと捕虫網はあんなに元気よく遊んで帰っていったのに……。

しからば、夏をどうするか？　江分利は毎年五日ぐらい、高原のホテルに滞在することにしている。夏子は家事から解放されるし、ホテル暮しは庄助のしつけにもよい。但し、これはあくまで予定であって、結婚十二年いまだかつてこの予定が実行されたことがない。いいたかねえが、先立つものがいつも先立たないからだ。今年も、ボーナスは月賦とバーの借金とそこでまた飲んだのとで費いはたした。

しからば、夏をどうするか？　都会の悲暑地（避暑地ではない）にもいろいろ面白いことがある。

庭をつくろうと思った。庭を豪華にすれば、涼しくなるのではないか。江分利は古本屋で外国の建築雑誌を四十円で買い、植木屋を呼んだ。

「おじさん、これね、これみたいにしてよ。これは広いけど、部分だけでいいんだよ。ええと、芝生が三坪さ、芝生の坪は普通の坪より狭いんだろ、相場は坪千円だそうだけど、八百円に負けてよ、三坪で二千四百円か。それと杉苗を五本、一本四百円として二千円か。蔓バラを三本、これは張りこんで三百円ぐらいのヤツ、全部黄色にしてね、合計で五千三百円か……どうだいおじさん、五千円に負けねえか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com